2A-98

3183

爲然居士太田貞次郎戲著

お眼鏡違ひ

大阪　綺文館發兌

特52 215 No.15507.

自叙

近頃我國の學問世界には文學上の思想有る人勘考へ無きも知人朋友乃著書に批評を加へ序文を與へ若くは校閲の名を假す者多き而して其批評たるや多くは過賞に失して恰も書物の巻頭にお世辭を陳ぶるに一般なりされ豈に某は我が友人なれば其著書も我が友人なり曰ふの念慮より發したるに他有らんや序文とても又然り序文は決して著者及び其著書を讀者に紹介せん爲乃みに書くに非ず自分と著者と意見の違ふ角々を書陳ぶるも何

其方が面白く序文てふものゝ主
といふも又みだりなる可からざる
某は著者と同斷の責任有り若し夫れ賣書をして瑕瑾
少き者ならば猶ほ善き然れども惡者をして瑕瑾多き
者ならんをえ著者の醜評と同時に校閲者も又醜評を
受けざるを得ざ鑑みざる可けんや然るに世をえ誰が
著述をもソラ批評ソラ序文ソラ校閲とて惜氣も無く
安賣せらるゝ大家先生あり是れ豈に世間の正直なる
讀者を欺く者にあらざらんや其れ然りトハ云へ之れ
大家先生の罪にえあらざ要するに文學の不振にして
尚ほ幼稚なるやらなり誰にもあれ文學上乃思想に甚

もの是なり總て平凡なる事柄を奇警なる言辭にて話
說する是なり而して一九の著書の如きは多く此類乃
滑稽に成れる者なり
文字上に生する滑稽　とえ野卑なる事柄を優雅なる
文句に綴りたるもの或は當字の如きもの〻類是なり
式亭三馬の浮世風呂の如きは文字上の滑稽に成れる
者なり
事實上に生する滑稽　とえ落語の如き者なきども多
くえ最も齟齬の甚しき事實に成れり西洋の滑稽小說
には此類の者多けれども日本に
之なしと云ふも可なり

形容上より生ずる滑稽　とは田舎
き道具などの置處を誤まれるが　らぬ
振するが如き二輪加の役者の容振乃如き皆此類なり」
今子輩の考ふる處を以てすれば滑稽を大概此四類を
出でず而して滑稽なる者は總て如何なる者かと云ふ
より預想外所謂る意表に出でしもの、規則外なるも乃即
ち調子外なるもの希望の外より生ぜたるもの等よりして智
覺よりし、感覺よりたゝ想像よりして「驚く可き奇景」より外
ならざるなり子輩は斷じて然る可しと信ず
或人滑稽の益なきを難ずるあり然れども子輩は小説
よりたゝて果して品格を高雅ならしめ以て風俗に益する
より虚言を構へて讀者を欺くの不德を學ぶより忍びんや

噫

さりとは我ながら嚙臍乃悔有りポリチカル、ノヴエル
の假面を被りて一番當季當座の花やかなる綺言麗語を
陳ね間々諷誠の文字を作り表面的より反面的より比較的
に誰やらを攻擊する乃愉快を取れば好かりしより我も
又文學上の思想にも甚だ淡泊なる哉又寧ろ政治的思
想より淡泊なる哉

己丑之歳第一月

著者

お眼鏡ちがひ

浪華 焉然居士 戯著

柴乃戸を誰が敲く、水雞か、之はしたり風……アラ悪ら始り

田べ水もんですよ、人を瞞してばッかりゐて、待

の引風迷宵はうらめしの風、花乃晨よそ痛はしの風、月乃

ともし先夕はは情しの風シカシ吾身よ取ては、マア嬉しの風の

づハークションを便り……聞けば聞く程嬉しくも何とも無いが、サ人心、

起さしむ一回札でもペラ〳〵五回札でもペラ〳〵拾回

ペラペラ札でもペラ〳〵、あの薄いペイパ

故に願く柳の惚れた風に散るか

た事が、高下駄穿て首ッ丈、惚れて

でも唯々諾々、アノ其處な犬畜生め、金の爲めなる奴隷

心、チエッ臭い、腐れたる盜人根性、いくぢ無い奴、ゲエー

ポッ、

盜み同様の事を爲るからは、少しは膽、力も有るだら

うよ……之は又存外お弱腰、決闘といふ恐ろしい毒炎

を、鬼武者の口から吹懸られて、オソロオソロ後退りせ

しは根が當座間よ合ひの才子なるからよは非ず、トハ

誹り德の誹られ損は社會の云へ旨くもお茶を濁たた去とは瞬の緒切て以來の失

風俗を害すること敗と、吾おから、心からとて、後悔たが爲ぬが朋輩のお

決闘より蔭で、ヤット密とよ「ッンな事は繊風だよウ」否をして

も甚だし先づ大事よせぞよ濟たた、殊勝々々

明治の壯士あつかましう、唾を迸たらせて云らく、奴を

滅多打に打てば好いよ……ナールお道理御尤も……

罪ですよ、志を賣り、理よ逆らひ、論を曲るなンかは……

古人結交アラいやだねエ、

以黄金アアゝ今の世に、誰が賢を賢とし、金よ易へよの語を守ら

ニ今人のぬ者や有る、無い無い、今人奔ニ尺寸之祿ニ走ニ絲毫之利ニ如ニ

み金に戀々執著せる者から

群蟻之附ニ腥羶ニ、聚蛾之投ニ燭火ニ、取テ不レ爲レ醫ト、貪テ不レ避、九て

此通り、漆塗の馬車ペンキ塗の門、書更紗フランチルの

下衣、上衣え元より、頭乃帽から足の靴迄、誰殿の玄關

權印と如何

どどぎるワノ、某のお手車でどざ

してゐる、心の奥底を尋ねて見ッ
ッて金を儲ける算段ですッ、ハテ[illegible]
積り、何を……ハテ知れたこと、善鳥を、
娼妓は身を賣る、誰やらの志を賣りしも同様、口と腹は
反覆表裏、兒手柏乃貳心とは之か、朝は官權とあり、夕は
何やらの民權となる、絲の如く染り易かりける人は、何やらのヤ
二語と天機を漏すレろれホイろれと、一裘褐を更へざるは、朝令暮改ふる
の恐あると等ちく、丁度ッレとコレとを一對だらう、先づ其様ふ
故に明言せざるか者サ、

舞踏は踊らッしやる[illegible]を、藝妓は能弄戯て鼻の下
二ほん坊主乃、丸裸はならッちやる[illegible]を、さう悪さま

に云ッしやるな、時も時折も折、我も汝も浮れ鴉の、阿ホ
ウカイ節を謡ふ、飴屋ろうこのけは大道廣く、憚り無き此
節柄、脩身道德倫理五常を、己れ獨り、守顔ふるも片腹痛
い、何故は滄浪の水、清まば以て纓を濯ひ濁らば以て足
者が十八番と見受を濯えぬは、自分獨り澄ちてゐるのは、ツマリ椽の下の
たり去と舞ですッ、誰れ碁人も無い、云ふて見ると、孔子なども馬鹿
と著者も ですッ、時を知らないで道を說た、丸で牛刀を以て雞を割
偏屈原なる哉 くと一ッ事、ハテいじらちい、今乃世の人は、清廉の士、盛
德の人を、呼んで馬鹿正直だとサ、呆れッちまふよ、身は
立ても人は立ぬ、憚り乍ら義勇など云ッ、馬耳は東風、
ますがひは打ても、聽ぬ人物の

談ぜるを、旗を荷ひ毬を被る者を羨まぬ模を含ふ者と、太宰の滋味を語るを同じ事だもの、皆な結構とは思ふまい、

誰が自由を渇望する、誰が自治を熱心する、彼は曾て一度も、馬に乗ッた事は無い、奏任官だと言れた事はない、月給を取ッた事は無い、判任官だとさへ言れた事は無い、何を知るものか、學問は素より、實務も知ない、其癖に生意氣、滅相も無い生意氣、奴、必定名譽心に憧れてゐるのでせう、其心根實に可憐、シカも又不便です、

誰が人民の爲だと、誰が公衆の爲だと、馬鹿々々しい、ヤレ建白だッテ請願だ、何だ漢だと云ては見るもの、總代さま、何千何百名、何郡何ケ村の總代樣もお恥ぢい、誰一人「言出すからは、何處までも、立て貫てやるからぬぞエ」の意氣込が有さうか、鼠に猫、蛙に蛇のやうに、[illegible]を恐れたか、お[illegible]の御[illegible]を畏れたか、三大事件等の幽靈は、有志者の枕下に立たらう、建白書に請願書に、連印した人民こそ大迷惑だ、之も矢張名譽心か、

我が政府は國會の假議事堂に建られるとサ、餘り立派で無くもがなだ、知れ限てゐるよ議員さまは……必定マグナカルタは、如何な骨牌ですと、澄ぢて問ひたまふ連中でせう、國會とえ「ヘエ博覽會乃大きなどゝ、黄顔で言ふてゐらッしやる、談人

稅で飯は食はぬぞの御一言御尤も

宙の音も出ざりしならん

く眞の議員殿は先づ暫らくは、草廬の中より、待ッて居るかも知れん、ハテ面妖な、誰が政治思想乃思ひ子だらう、誰が新日本の人民でせう（著者曰く）己だよ、

明治の淑女とは、ハテ誰やらだ、明治乃男乃兒の眼中より、シカも女權論を主張する、明治の男乃兒の胸中より、浮べる淑女とえ、ハテ知れたこと、藝妓……其藝妓を得々然として、何の會へも、席へも、聘ぶのえ、善い事か、野暮でえ判りさうも無い、

誰が此淑女と一對の才子てせう、狡猾て惡ぎれた箸まで巡査ですれ書生でめ男……いる才子と淑女との、跋扈する限りは、到底すれより女學雜誌いらつめ等の、記者が望む通りえ、迚も婦人社會の改良進歩を圖り難いです、新吉原の不夜城は、洲崎乃黄金叢は、明治の女子不進歩の一大記標、外面如菩薩内心如夜叉、女子は男兒乃奴隷、女子は三界に家無し、など云ふ語え、勿々忘れやうも無い、ハテ心ある女學士よ、卿は口惜しうはムらぬか、

されば、女學士は往々、耶蘇教を借りて仕事を爲やうと思ふてゐる、ソレも一個人の爲りは得策でせう、シカ佛道ッて目を入れシ婦人社會全體の爲りえ、大不得策です、

ぬに等し女學士よ、みゆるも有らば、一通り物申ちませう、卿の同からずや輩を御覽な……夫を持る爲りは、[illegible]

其不得策の理を諭せざれば

ぬ爲に、婦德を傷けられた、一方の人も、他方の人も、思ひし通りにえ往かぬッた、○夫といふ者は議論が有る、若しも男が女より優れる者ならば、夫の議論に女は感化されるる、女え服從せねばならぬ、ダカラ隨ッて口を閉るやうなる、夫ばかりか、女は家政に、若しも小供が有たなら、小供の養育に追れる、假令他に之を管理し、之を挫くは明制配する人が、有るよもせよ、女といふ者は、細心小量なへたコリ上に、意地惡るい、疑惑深い、執念深い者だから、構はぢヤ一件復え入れぬが持前です、

女子は弱き者なりと知りつゝ、女子を制配する人が有るよもせよ、女といふ者は、細心小量なへたコリ上に、意地惡るい、疑惑深い、執念深い者だから、構はぢヤ一件復え入れぬが持前です、

雛の腰じ

やな

阿波の鳥、京の鶯、吉原すゞめ、女は勿々口喧ましい者で す、裏屋の婦の井戸側會議は、隱れ無い者ですが、喋舌るのは、話の品こそ違へ、女學士迚も多くは御同樣です、嘗て……ト云ても、一昨年ても、去年ても、今年の春まで、女學校への往き、女學校よりの歸るも、又學校内のターブル乃上でのれ、運動場であれ、新駒の評判おゝを

三人集れは姦しコハ言はずもがな

した癖が去ねば、玄關番乃お兵兒と、チチクリあゝし癒さが忘れられねば、隨分文珠の智慧が出さうな時は、ツレは天晴、お口は先づ、向ふ處敵なだ、ずれだもの、多くは先づ當世娘は、常盤流義の變則で、蔭は操イナ貞女を破ッて、日向は貞女を立るといふ事です、アラいやですねェ、もうふざけッこ無しよ、

誰が云出した、濱劇の改良、ハテ閑人も有るものかなで

す、男俳優ばかりでも宜しく無い、女俳優も合併して興行しろトは誰が物數奇、品よも事よも依りけりです、丸で俳優や觀客の色事を周旋つやうな者です、昔は男俳優が出來て、影陽が流行た、ソレ好い摸範、ソレ〳〵深く考へねばならぬ、名優であれば、男でも女を扮して、眞の女かと思はせる、成田屋の八重垣姫も岩藤もいゝ〻、新駒の女形はどうでゲエス、只アレは「男だ」と思ふてゐる感情がアヂなからで、何よも今更女俳優よ、仲間入おせねばならぬと、いふ事は無い、例を取てみると、大坂天滿屋の隅より來る天神裏の小屋芝居の、女優某でさへ、男だらうと巡査よ、怪しまれた位だもの……況して――二度いふと風を

さりとは助倍ばッた鑑定かな

例證思ひ掛なき小

引く、

ブールスの旗色勝を示して、株式米商會所は失望敗北、さり乍らブールスも……

今は株式米商會所は拳げ、ブールスは喪服を著く、アラ當世え秋乃天ゝ猫の眼か、社會燈氏の聲色、さりとは倔儡師、胸よかけたる人形箱、佛出さうか鬼を出さうか變るが早いのオテテコテンです、今に到りて、ブールス論者おきもじさま、イヨー儀野氏出かしやれさ、アハヨク藤田氏よ乘勝れたよな、アヽ有爲轉變の世の中じやなア、

多分のぞき眼鏡なら

猫に小判とは苛酷なり守錢奴が金庫中の貨幣位ならん

一はデンシンとなり一はお役人樣と敬して遠くるの風となれるあり

〓〓〓〓〓〓、何縣の郡會や村會なは今に嚴しく要用を爲ぼです、何十番議員も唐言葉は解らぬと罵る、何番議員乃返すく〳〵も、議案の說明ばかりを求むるは、說明に說明を要する譯にて、此人達はアンマリ議場の事にも明るく無い、徹頭徹尾原案贊成の、一言で持切れるは、全く己を得ざるからの發言、碌々何を議する事かとも心得ねば、アノ事もカウで有り〳〵かと、後でも往々臍を噛む、ハテ心外な、此人達に町村制は猫に小判、當局者乃心配も折角徒勞か知らんテ、

想ふに封建乃弊風も、藩閥時代の餘弊も、大都會の或部分にも、情實緣故となッて存ッてゐる、田舍の各地方に

は、平身低頭となッて存ッてゐる、一ッは偏頗の甚はだしきもの、一ッは卑劣乃甚もだしきものです、テも苦々しい、

誰か云ふ身を犠牲に供して、國家の爲に盡くすと、世の志士を以て自任して居る人も、政治的事業を目的として、ソラ內地改良ソラ條約改正と、いろ〳〵心配をしてゐるが、帝國策の爲には何が最も良いか、內地乃改良も條約改正も急務でせうが、差詰め國力を養ふが急務です、カノ內地改良だなンかと云ふて、反亂を圖り、內訌を起すものは、取るに足らない、政府を兄[illegible]人民を弟として見れば、此兄[illegible]

内訌は外敵乃隙をこたらへる樣な者です、ナル程名人
な政治思想は必要です、大同團結もして見ると宜いが、
アマリ政治の事ゝ浮れてゐてゝ、往々過暴の人間が出
て來る、狼藉の政黨が出來る、スルと政府も厄介だから、
……何ともならない、消極的の價を拂ふやうなある、
ツマリ國力疲弊たゝて、政府も人民も共倒れだ、ダカラ政
府も無理を聽き、人民も小言を止めて、お前私の差別な
く、政府人民を別隔あしゝ、心を同うゝ力を合せて、外乃
侮を受けぬが感賢です、今乃時ゝ方りて、身を犧牲ゝ供
して、國家の爲ゝ盡す位なら、政治的事業より、生産乃見
貨幣は大自在力なりとの西諺も有れ込ある積極的事業を起すが、よろしい、もと〳〵子路の

ばイクラ志ゝ比したゝ感心、シカシ敝袍を著て、心中無一物嚢
志士と云ふても貧中無一錢では、迚も迚も始まらぬこと、志士と云れるゝ
亡志士では、國事犯でも爲るより、仕方が無らう、
は當世に於て何か世ゝはデモ國事犯者が有る、此人最ゝ物數奇らしいが、
爲さんさうでない、本來くう事が、出來ぬ悲しさゝ、心中無一物
之は酷評なア の減腹を抱る難さゝ、云はゞ苦しまぎれゝ思ひ立ちゝ
名譽心、大功ゝ細瑾を顧みずで、國事犯を起すてふ名を
假りて、泥坊になッゝ者が有る、之ぞデモ國事犯、テも忌
はしい、……
何府何縣乃地方へでも、東の京から長官どの〻、來ませ
ゝ節にゝ、馬車を以て護衛を以て、送り迎ひは當り前、も

御無理御尤も

しデモ國事犯者の、狼藉など有ッては困ること、一體全體主人の送り迎ひは、手代丁稚の役目、人に禮義は有可きもの、獨り上よ仕ふる下をのみ、怪こまんやです、[illegible]より以下、精々[illegible]、大慈大悲の、御利益は無くとも送るよ宜しく、迎ひよ宜しく、又止まらるゝよ宜しきやう、注意なさいよ、つらい事も辛棒がソレ……金じやない、……[illegible]

コレサお[illegible]どん、[illegible]盃たゝておきなから、其婿樣を踏み付て、お前ひとりお意張てないよ○アレいやだねエ、妾が意張ないでも、人が此節から、お[illegible]樣〳〵と引立て、おくれだもの、今よ見てゝ御覽、ナニあいづらよ負る

之と哲理らしい中らずと雖も遠からず

もンか、○ろれも左樣サ

凡そ人物の起るは、一時です、秀吉は尾州から、家康は三河から、起ッて、共よ六十餘州を靡かせたが、三河も尾張も、又信長の起ッた美濃さへも、今え衰へてゐる、薩の地魔の市、永く繼嗣となる、人を出せば格別、ヨモヤ出ーはすまい、ハテどうでせう、思はくは外れやすまいの、今まで人物乃起ッた跡を考へて御覽な、東北地方乃人民は、後藤伯の大同團結に、同意してから、ソロ〳〵其事で東奔西走し初めた、此大同團結といふこと……、餘程腹の太い、所謂る眞の豪放磊落の人が、集まら無いでは、大同團結は至難中の至難、云ふ可くし

大同團結の創業は後藤伯な

るが其守成と誰かの如く同じからぬ、其心の同じからぬより、假令事が小さくとも、ツレから爭ひ乃起ることが有る、私事え大きくとも、濟み易い、公事は小さくとも、濟み惡い、一個人よりいゝる事で、爭ひえ起らぬが、シカシ社會よりいゝる事では、爭ひが起り易い、だが博愛の膠え同心の漆え、幾十百萬の人をへバりつける、テも大同團結とは、手際の熟字では無いが、ハテ人目よ入易い、

臭い物よは蠅が群るとは誰が言ふた、東京よ臭い者が有るが、之無きやうよ思へど、ちゃ〳〵蠅乃群るといふ事を聞及んだが、ツイに追ッ拂ひを喰ッた……

保安條例

保安條例は早や一年の向えりが來た去年十二月よ思にあてられて政府えぎりき、青天の霹靂で、一聲頭に墜ちた時よは、誰も皆を怨む者お周章狼狽いた、流石の元老諸議官殿も、膽を潰されたは小膽ゑり怨まざでせう、何の彼のと云ふても政府だ、神風ふきちゃ如く、野る者は大心ありー奴原は、皆な散し〳〵、餘りの事よ腰を拔ちゃ者瞞なり而して此小も有らう、尻もち搗た者も有らう、錢ある人も錢なき人瞞者も大瞞者も同じく、

炭、巣はかゞ門松立ゞ餅つかゞ

鞠中腰の弱き仲間で正月を迎ふる處じゃゑ

なり の福船入りで、ホタ〳〵であッて、シカシ之は〳〵と

か、る家ばかり花の吉野山と、洒落てもゐれゞ、實シンケンよ驚

にも恋は來にけり、さりとは無情の恋よ

きて、思ひ懸なしと取物も取敢ざりし人も、多かりたと聞てゐる、月日經て昨日今日となっては、追々特典も預を、ヤレ特典だの、ヤレ條例廢止だの云ふも、ハテ妙なもの、未來永劫の末迄も、保存して置く方が、宜かる可きは……どうした事か、ト云ふも無益な心配、

日本人記者は頗ぶる奇人、詩客めいた、文人めいた其筆が、經も緯も織出す文句を、近頃目新らしき、的を代ふるばかりの一篇も度々出て來る、這般を、惜氣もなく用ふ

チョソ腦

廻は大早に雲霓の詩上も流行せる言葉は、大和民族、國粹保存旨義等です。

てゐる、マコレエ韓退之を走らす名文這般の外に同雑誌上も流行せる言葉は、大和民族、國粹保存旨義等です。

心地盥嗽

○同雑誌の記者も國粹旨義を美術旨義だと解釋して日本人記者を羽すなる可し

したが、少も文字を蟲干ては如何ですか、何だか古臭いやうですねエ、

國民之友佳人之奇遇など有てより、之乃字が流行ふ

が、文いでゝより一字名の雑誌が續々出た、新奇を好む

は人の性だから、金儲主義も新奇が第一です、シカシ

何事も猿の人真似して、流行の狗となる可らざです、

暗に女流の尻押あり

誰が我國の婦女子も束髪を結へと云ふか、日本婦女子

ト見たり

乃髷も美術だも、苦心の上も苦心したものだも、服裝と

は僻目か

能く揃ッたもだ、アノみぐるしい、風致の無い束髪と、結更ろとは何事です、元祿前後も市女笠を被ッた

り、布で顔を包んだりしてゐるさから、髷はいまは無ッたが、シカシ塗笠編笠などをも被らぬ今日では、束髪などでは見苦しい、ダカラ日本の婦女子は、非常な髷を苦心した者です、

陳べ得て髷店の棚の如し想ふに著者が天具爛熳の花を手折るまに〳〵得來りしものならん

島田　東京島田　島田くづし　中島田　かけおろし　兵庫　立兵庫　横兵庫　蝶々　新蝶々　ばい蝶々　たのぶ　わりたゞぶ　やつこ　すゐしょ

三ッ髷　さつがうがひ　江戸さつがうがひ　割鹿子　いびし　うんてれがん　天神髷　いてふがへし　深川　勝山　丸髷　かさはづし　兩輪崩し

唐團扇　松葉くづし　橘くづし　大吉　四ッ目が

へし　丸輪一ニ　阿彌陀　二葉　兩手　ぼうばい　お染髷　丸福髷一ニ　お初　芝雀　天保山　じうのう

茶せん　竹の節　おたゞり　稚兒髷　等

（すさがみ）達磨がへし　おたらひ　櫛卷　ちよぼくれ結び　すきあげ蝶々　政岡　猫の耳　等

右の如く澤山ある、此外尚ほいくらも有ませう、之を見ても知れてゐる、單に不便利を以て、之を退けるのは、其意を得ない、ハテ束髪論者も入ざる御世話、御心配、宇宙一個の閑人でゲエスねェ、呵々

氣車に乘るが商賣でないト、ぶつ〳〵呟てゐる、ステイションで氣車待の、田舍人こそいじらしい、ドウたた

かと思へば、糞擔ぎだなと鑑定せられて、今一方切符きる人よ叱られたのです、阿房らしいとも、馬鹿らしいとも、錢を出して居ながら、コンな弱い事が有るものか、然り左樣、ビヤン、モッシュです得手たて[illegible]

畏れ多いこと京童[illegible]不親切な[illegible]が有る、が何を言ふか一體御自分を何と思ふて、あらッたやるのか知らん……

……ハテナ、

過ぎし年或ユーロッピアンが、パスポルトと云ふて往來券を見せぎよ、滊車よ乘込んだ、停車場見せろ見せぬの議論が、乘込んだ後よ沸騰たゝ、其西洋人え何故見せろと、乘込ぬ前よ云あろッゝ、ソレは其方の不注意と云治安法權は西洋人の金城鐵壁でゲエスよ張てゐたが、仕方なたよ滊車は出した、待て暫たゝ、之が日本人なら、如何でせう、テも心外な事、

マルワ號强姦一條は、能く有さうな事です、何分容釋はならぬ事で、二十金三十金よは、替にられない、丸でノルけしからん誤名說マントンの二代目です、すべて人間が心よ進まぬ、不承諾不同意の、不の字を人に侵された時は、いくらか恥辱乃泥へ足を入れて、百分一にもせよ、千分一よもせよ、奴隸の境内へ踏込だものです、磯田夫婦は如何した事か云甲斐ない、實際無りた事か、なれば重疊大慶の至り、又たとても外國人に侮られたとえ、聞さくも無い事です、云たくも無い譯です、ハテ忌々しい、

ベテの誰が洋行したと云ふ、倫敦の風月巴里の美人、その談話話も又お土産か、大層立た甲斐も無い、言語不通の土地へ押が出してはいくら日本の紳士でも、丈の無い反物同様、巾一ッなりは利くまい、事情も少しもわかるまい、夫はまだしも、バンクノットで尻を拭た人が有る、日本の塵紙で尻を拭て、ホテルを退去された人が有る、プロスチチュートが思ふて、無二無三にレディの首を擁してキッスをー燕尾服を著用す可しの場處て、失敗ッた人が有る、ビルやカアドの間違ひはお安いこと、英獨佛折衷の洋服を著して、得意然たるおん心根、柄にもおうらめしい、何々國おどゝは片腹痛い、似合申さず丸で[illegible]を[illegible]、歩るくやうな者です、夫でも自分は耶佛の覗[illegible]た氣が[illegible]した氣が、シカシ之は[illegible]には滅み合は怪多に無い事です、しむに足らずロー耶蘇教信者の重立た人が、耶蘇教の公許を政府へ請願マ教とプするると、直ぐに佛教徒の或部分の人が、公許ーして下さるロテスタント教はあと、茶々を入れさうです、宗教家と云ふ者は、兼て道同じく基督の宗門德高き人達かと思ふてゐるさに、扨は人を立ては身が立なるに何ぬと、いふ奸商流義を遣かすかと呆れ果さ耶蘇教の蔓且爭論するのみなら延は公許と默許とで、大た違ひも無い、佛教の盛衰はらず干戈を動せし耶蘇教が有るからだと云ふより、寧ろ佛教自身乃招くにあらず所と云可しです、一體全體互ひに傷けやうと、思ふてゐる量見が大間違ひ、ソレと云のも宗教を、飯喰ふ道具乃

やうな、心得てゐるからです、其證據には孰れも、信者が減る毎に、お布施や寄附金の、手取が少ないから、ソレで一は他を、他は一を、歇のやうに云ふのです、

婆さんの化粧と坊主の酔顔は宜しく之を明治の清少が草紙中の材料となす可し

宗教家でさへソレだもの、況て圓頂法衣の身で有るから、

何故に捨ける身ぞと折々は
姿に恥よ墨染の袖

といふ、慈鎮和尚が戒さへも打忘れて、浮れに浮るゝ司空圖が詩なる解吟乃俗僧多き時しも、親子兄弟禮を失ひ讓を忘れて、稍もすれば分産論を法庭へ擔ぎ出すも無理でない、夜會乃おとこ文、俳優への贈物は、蓮葉娘やオテンバ孃の氣晴しと聞流して然る可く、皆人は倫理を忘れた譯でも無れど、道德や法律の範圍外へ足差出せるは、淺季の世なりと歎つも愚です、

六道の輪廻三世の因果、我も知らぬ人も知らぬに、熱鬧場中にアクセクする有樣を、一服乃清涼散を飲んで萬刧の暑氣拂ひなるラムネよりも、舌うちせる人より見れば、何がサテ浮世乃甘味は、百八煩惱を滿足するに在りイです、圓き頭に前世を悔ひ後生を祈り、過去を戒め未來を樂しまんと、說教壇に口廣くも、爾お衆生に爾ぢ凡夫よとの、佛たいしたる顏して、いふてゐるお住持も、何時とか雇婆アのお尻を捻り、たる經に亡夫の忌日

著者の腸を見拔いたぞ

を、殊勝なつとむる寡婦どもを誑らかす、己れヤレ菩提の種を蒔せておいて、未來往生疑ひなふ乃引導も能く出來た、果は女人の業ふかき者を、木魚講に入るゝなどえ、一休隱元も能えぬ大智識、今さら還俗を思ひさつるら、一そ凡夫のうぶが優です、

惡酒茶は止すが宜しい

解し難きえヤリヤの懷胎、摩耶夫人のお產、何がサテ佛言ふは言はぬに優仙祖師の御傳は、取も直さず一種のローマンス、事實をるとは此確めてえ、有難味を損する譯です、アーメン南無阿彌陀一項の事アとさへ、云ふてゐれば、往生え疑ひないこと、心まつすと見へたりぐな信者たちえ、努いらぬ穴探ーをし玉ふナ、ヤレ〳〵我等は羊よて候ふ、我らこそ六根清淨ならぬものよて候ふ、

さらば馬琴の紀念碑を、さらばボアソナアドの紀念會を、さらばグナイストの表彰會を……憲法の、法律の、小說の、師匠は三先生でせう、一も二も、其人の書物を不朽乃寶典、金科玉條、云甲斐[illegible]時節です、新思想と新文章とを合した、新機軸と云ふ可き者は無い、小說乃世界では、美妙齋でどざるワノ、春の家でどざるワノ、南琴でどざるワノ、二葉亭でどざるワノ、是等乃二三子の外は、相も變らぬ續物の作者です、馬琴の句調を假ッて、春水の筆法を眞似てゐる、デスカラ馬琴の理想は無く、春水の「穿ち」は無い、まづい、水ッぽい、

此種の趣向に慣る人に多少の西洋水を注入せば其趣向や必らずダレシング、ファンシイ、ボール等を假りて寧ろ甚だしきことを寫すなる可し

ヤレ温泉場、ヤレ下宿屋、ヤレ割烹店、などゝありふれたものばかり、小説家の襲中よは、キマリ限ッたものばかり、ことに怪しむ可きは、一離一合の早いこと、萍や今日は向ふの岸よ朕き、稻妻や昨日え東今日は西、うは兎も角も、人間の離合は然う心易い者で無い、人生の行路よは多少乃難が有る、情海よえ自ら波瀾が有る、今の小説の一離一合え、丸でチョンカ間のやうです、其早いこと、今日一佳人が一才子よ圖らざる縁を結ぶと、明日は其才子又え佳人の身上よ、或故障が起ッてゐる、萬篇一律、シカもチトとも些しも意匠を凝したところえ無い、何處よ小説の眞味が有る、何處

よ人情の「カウした者じやる」など、感心する所が有る、何處よ脚色の「妙だねエ」と、感心する所が有る、ハテ一ツも無い、

法理とさへ云へば、ボア先生の腦中から、湧いて出たやうです、幾萬の法學書生え、悉くボア先生の說を受賣してゐる、デスカラ法學世界は多く、同じ議論の戰ひです、法學校から出た人は、裁判官であれ、代言人であれ、皆なボアソナード氏の恩澤よ浴してゐるのです、憲法も其通り、獨逸ばかりが手本か、殊よグナイストばかりが師匠か、如何よエヤニュエルでもカントでも、いくら智識あり道理力が有ても、皆が皆まで、金

言確語とは云まい、彼と此と折衷するのが、事物の完全を致す、最も捷徑上分別です、

改良乃主意からして、女子の髷や服裝の事を、やかまゝく云ふた、羅馬字假名おごり會が起ッた、何にも、彼まも一時、改良といふ事が流行した、去乍ら此改良は一ッも効が無ッて、其も丿ノ笞です、其改良はッヤリ變更といふ事だもの……

洋裝の婦人は元より物數奇、和服を贊成する著も又物

女子の服裝は改良するも及ばない、長袖舞ふが如くて面白い、西洋でも婦人乃服を、餘り便利でない、殊にコルセットを用ゆることを、頗ぶる宜くない事です、デスカラ其様なことを、眞似るまえ及ば無い、顔の四い鼻の低い、

數奇なり

色の蒼白い、腹の太い、尻の大い、女の洋裝は、テもない丸之等を猿の尻笑ひと謂ふか

で狼ま衣です、或いぢ惡な書生が、一日或雜沓の場處へ出懸けて、或令孃が洋服の裾を踏んだ、シカもチョット

どうやら御經驗らしい

踏んだが、無殘や令孃え倒れかけて、思はぬ顔ま、時から

ぬ紅葉……ハテ氣の毒な、折角得意に飾ッてゐらッしやるものを、

書生といふ奴すかぬ奴です、壯士といふ者おわい者です、勿論サリスバリー侯もグリイヴランド氏も書生でした、ガンベッタ氏もカルバルヂイ氏も壯士でした、シカシ其人達え、桝檀は二葉より乃、香ばたさが有ッさでせう、今目ま見る書生、壯士乃輩らは何だい疣の好ぬ處

テも酷なる哉

が有て、シカも風態さへ新印のやうです、シテ食客の口は無いか、玄關番乃空祿は無いかト尋ねてゐる、物見高い都人士雜沓の場處へも、誰彼よ遠慮はせず無禮と失礼とを口癖よたて、五錢乃至は十錢の、ステッキを振歩いて、人をおしわけへたわけ、矢鱈無性よ大道せまきまでに、意張てゐるは、テも氣障な……極たてつけの好いんだよ、

藝娼妓をうき川竹乃流れに沈んで、吳人越客乃顏色を伺ひ「玉手千人枕、朱唇萬客嘗」ばかりの、商賣柄よ似合ぬ氣障が有る、引つけの座で、之は失敬な、お客を睥睨しての能弄戯ばかり、役者の評判、慾氣かーの面をして、ヤ

レお鮓、ソレお菓子との注文、チト櫻よ驚だなど、目前の誹謗、諷誠寓意の端唄も下さらぬ話ですす、叱こ乃行儀知らぎめ、之は無禮な、あうび者の推參は世乃常とは云へ、時めける聘家の門前へ、車の横づけとえ、シイシイ、ヤレめりけん、ヤレどいつ、ヤレふらんすと、理髮の好みを、丁稚野郎までが爲る時節だよ、チョン髷は東京よ日々出入する、葛西の兄アが頭よも、大坂よ家々の則を預る、淨人の頭よも、恬として感ぜざる如くに、舊樣を改めません、角力取は依然たる大たぶさ、新築の家は土藏で無くば、煉瓦造るにも拘はらぎ、昔むかしから大丸は今よ、小供ーと呼んでゐる、アレも國粹か知りません、

無念晴しお察し申す

セナア氏曰く爺髷は國粹なり

丁稚小僧がシカシ相も變らず、五年十年の精勤して、丁稚から手代、手代から番頭、乃で遂よ〻暖簾わけとなり、分店と云つよりは主人の肩を持つて大風だ、御病氣だ、其外冠婚葬祭よも、ヘイハイ旦那様、御顧問役にでもなる寮人様、坊様、お嬢様として仰ぎ奉り乍ら、立働く爲に、何時が寧そ上でも驅つける義務が有るトハ、サテも〻窮屈な話、之分別なりほど引あはぬ者は無い、土用三郎よ氷を束より仕入れて、此地で鬻ぐより引合ない、サテ奉公も月給よする

民間に元老院を設

が、此上なき便利、一舉兩得、主人にも奉公人よも宜たいから、手代番頭の持逃ふどの氣遣は無い、

學校殊に小學校で、德育をさづける教員は、成る丈け老立しては人が然る可きとて、知れ限りた事ですが、各地ともよ老奈何ん老人同盟會人は不向よて、不具者の次列よ座る時節で、いづくも皆も面白しあ若人ばかり、小學校乃教員ふどよは、猶更多い、シテ其と思ふ人達は多くは不[illegible]です、何しろ師範學校などで練上げた血氣の人ばかりだから、仕方が無いと云ふもの、お職掌から餘り褒めた話では無い、デスカラ合宿所を立て、學務委員を其監督よして、品行簿と云ふものを、備へておいて、サテ毎日乃勤惰や、平生の行狀を書止めて、ソレで黜陟したなら、宜しからう、ハテ知らんこと、教育方よりは兎よ角、教育者を精撰したい、視學官が流石の慧眼も、教員が退校後の事は、ヨ

「寺入の蒸物」菅原傳

授手習鑑より來る

モヤ見へまい、怪たの風呂敷包は、ハテてらいりの蒸物か、誰か子思の親孝心、ならぬ〳〵、

某どのは非職で、誰殿は免職で、當分儉約の筈だよ、メッキりお遣物のお買入か澤山おのは、ハテ不思議、まじなハテ魚心有れば水心

ひを以て病を療するは、太古のこと、[illegible]ソコ宜しき様よ」とえ、ソリヤ舊幕時代のこと、此聖人君子の多き世の中よ、誰か其様な事をたませうぞい、

太功記の十日目今はなしおか、義理固い仁侠よ勇む、有德の君子も無いか、ハテどう駒才三の濡幕今もたたろか、昔は刃よ服して、子の不義を諫た、刀自さへ有るよ、今は女を旦那取よたて、左團扇で老後を、楽〳〵まうと云ふ親が有る、他の難義を見兼て、救ふ意を發しる人も有るに、他の懷中物を狙ふて、蹴倒してでも、攫取らうといふ人が有る、他の事業を賛成して、資金を出して遣った人さへ多いよ、他の商法を妨害して得意を横取たやうと、云ふ人が尠なく無い、先づ之ほど違ふてゐるのです、武家魂が無いからです、道義といふ固い締りが、無いからです、人を見たら泥坊と思へとえ、今日此頃でせうかヲ、

商標偽造の如きも最も多くやうと、云ふ人が尠なく無い、先づ之ほど違ふてゐるのです、武家魂が無いからです、道義といふ固い締りが、無いからです、人を見たら泥坊と思へとえ、今日此頃でせうかヲ、

西洋の二十四相だの、東洋の三十二相は、サテおいて、美人といふ者は、古今よ撰みを異よたてゐる、まるぽちや瓜核どころで無い、古の美人巴や板額え、頬べたつまみ

古今東西の美人説を聞ても知れてゐる、多く白魚のやうな指をした、痩げて至れり盡せり

出したばかりで、白大乃臀を持てゐたことは必定、其力すゐ者では、然う力が有さうも無い、スレば今の所謂肺病人同様乃美人とは大違ひです、ハテ誰も心配えいらぬこと、美人のデフィニション、一定しさ者では無い、さるを誰が色白面長の動物を携ひて、美人だ良妻だゐごゝ、揚々自得したてゐるか、テも片腹痛い話、

新聞記者といふもの乃、往々偽君子が有る、表ては盛德乃貌を粧ふて、裏ては不德な事をしてゐる、何々乃事件を發いて、金にしやふ、何某の銀行又は會社へ、攻擊を加へて、錢にしやふ、惡い考へです、高島炭坑乃事などでは、

著者好んで内幕を發く大日本開闢以來又なき罪な人或

然る事は無ッたが、之は又しても有ると、社會乃耳目なンぞと云ふも、滅多ては受取られぬ、事實の誤傳は隨分澤山です、曩ては或やんどとゐき公卿に鋒さしむけたる某は、洋行の金を得て、出發前ては早くも心を變へた、某は或レディ、殺キラアの名ある人と、聯合して、墨翟をして岐路黄黑ては嘆かしめた、テも云甲斐ないこと、

不平黨は口喧しいから、騒立てるから、能く知れる、近ど何府何縣ともは、頻ては無理小言をのみ云ふて、博識多オの良[redacted]を、[redacted]の不平黨あるは、ハテ褒る者有れば誹る者有る乃習ひか、一應御尤もの樣ては思はれますが、之は又しても不忠な人民、

百發百中の鐵砲玉は無し人の事にして豈にお眼鏡違ひ無らんや

先づは是等をお眼鏡違ひと云うか、未だ〳〵有ともゝ、引幕乃引も限れぞ、山臺の山ほども有る、浮世乃舞臺に人間は役者かれば、悲しんだり歡んだり、泣たり笑ふたり、するとは免がれぬこと、世渡り下手、交際下手、皆なお眼鏡の違ふお庇所謂るお眼鏡違ひとて、ケント違ひの事です、的ちがひの事です、商船會社の株券をドッサリ、誰やらが買占た様な者です、某が極内で、飛切お安く、誰やらの地所を譲受たやうな者です、天ゝ口あり、地ゝ耳ある時節ですもの、知らぬ合點は已れ獨り、ユハ又滅相も無い、お眼鏡ちがひです「氣障な奴よ」と懍然とするやうな、別嬪ゝ晩まれて「ヤレおいてたナ」と承知すると同じくの、お眼鏡違ひです、又たゝ人は自惚と病氣あるの故を以て、お眼鏡ちがひは有勝です、人ゝしてお眼鏡ちがひの無い者え無い、がシカシ圖に乗り圖ゝ乗りて、嫌はれ作らも、執念深う「私は何々ですよ」と動かぎにみると、絹川の累のやうに、鏡を見て「エヽ此様な」と歎息する事が出來てくる、君子大人イナ、廉潔の士は功成て、勇退高踏するとやら、舅姑は永く隱居せぎゝ、若夫婦を制馭するは、宜ちくおい、之は又大しゝお眼鏡ちがひ、少しく鑑みざる可けんやでゲエス、

お眼鏡違ひ終

左の一篇は舊稿なれども聊か所感ありて卷末に掲ぐる事とせり

滑稽論

滑稽は英語なる之をルヂクラスチスと云ふ、滑稽は又小說の一資料なり凡そ小說の如何を問はず徹頭徹尾跌宕を以てし、富麗を以てし、悲哀を以てし、歡喜を以てして滑稽の一を缺く時は格段なる面白味有ると無き故を以て小說に滑稽を加へて讀者を笑はしむるは作者の巧みなる處なり尤も滑稽小說は終始滑稽を以てすべきこと勿論なりと雖も只小說に限らず談話にも演說にも又カタクルしき文章にも滑稽を適用するは面

白ふ抑も予輩の滑稽を好むや已に久しければ予輩も滑稽に於て聊か得たる處なきに非す是に於て乎予輩は禿筆を振ふて滑稽論を草するに到れり

所謂滑稽とは四原有り

一には言語上に生ずる滑稽

二には文字上に生ずる滑稽

三には事實上に生ずる滑稽

四には形容上に生ずる滑稽

是なり乞ふ逐一之らの滑稽を說き而して滑稽乃何者たるやを辯ぜん

言語上に生する滑稽　とえ口合地口あんだうの如き

だ淡泊なるからなり又況んや廿一年の今日にては政治的に學術的に分業行われば萬能多藝の人不尠に於てをや尋常普通の著述家に見識を保たしむるが如きは至難中乃至難なり已に然り然らば今日に於て著述家の新機軸を見んと欲するを能はざるの極なり

余は敢て著述家を以て任する者にあらず然れども縱に所期する有りて常に大に力を寓意放言の書に用ひんと欲せり又生來小說を嗜み稗史を好むの癖有るを以て持つたが病ひ嘗て兩三度之を試みしことと有りしかども淺學寡才の故を以て縱横自在に柳生但馬が刀乃如く筆の廻り兼ぬるより捗々しき切名手柄も無け

れば此「お眼鏡違ひ」の如きも運命は素より決せり余は此書が不幸短命として逸早くも露店に出されて白眼に路上の人を脱まへ其輕薄を怨むに到るも毫も悔ゆる所無き蓋し此書を漫筆にして敢て力を用ひざりきを以てなり

夫れ然り而して此書は小説の類にあらざ又スケッチ乃類にあらざ只社會燈氏が十八番の類なるのみ熱鬧冷嘲の評言なるのみ世間恐らくば其比無けん然れども之れ決して新機軸を出せるにあらざ彼の坊間流布せる所の田來星先生の所謂る改良小説と同伍せる者なり何ぞ撰まん彼と此とは共に當世の似非物なり豈

處有らば滑稽も又人乃意氣をして愉快からしめ快活ならしめて鬱憂不平の境域を脱せしめ以て大に効有る者と云えん然れども予輩の漫に滑稽を語るを欲せざ而して大に之を用ひんことを欲するなり

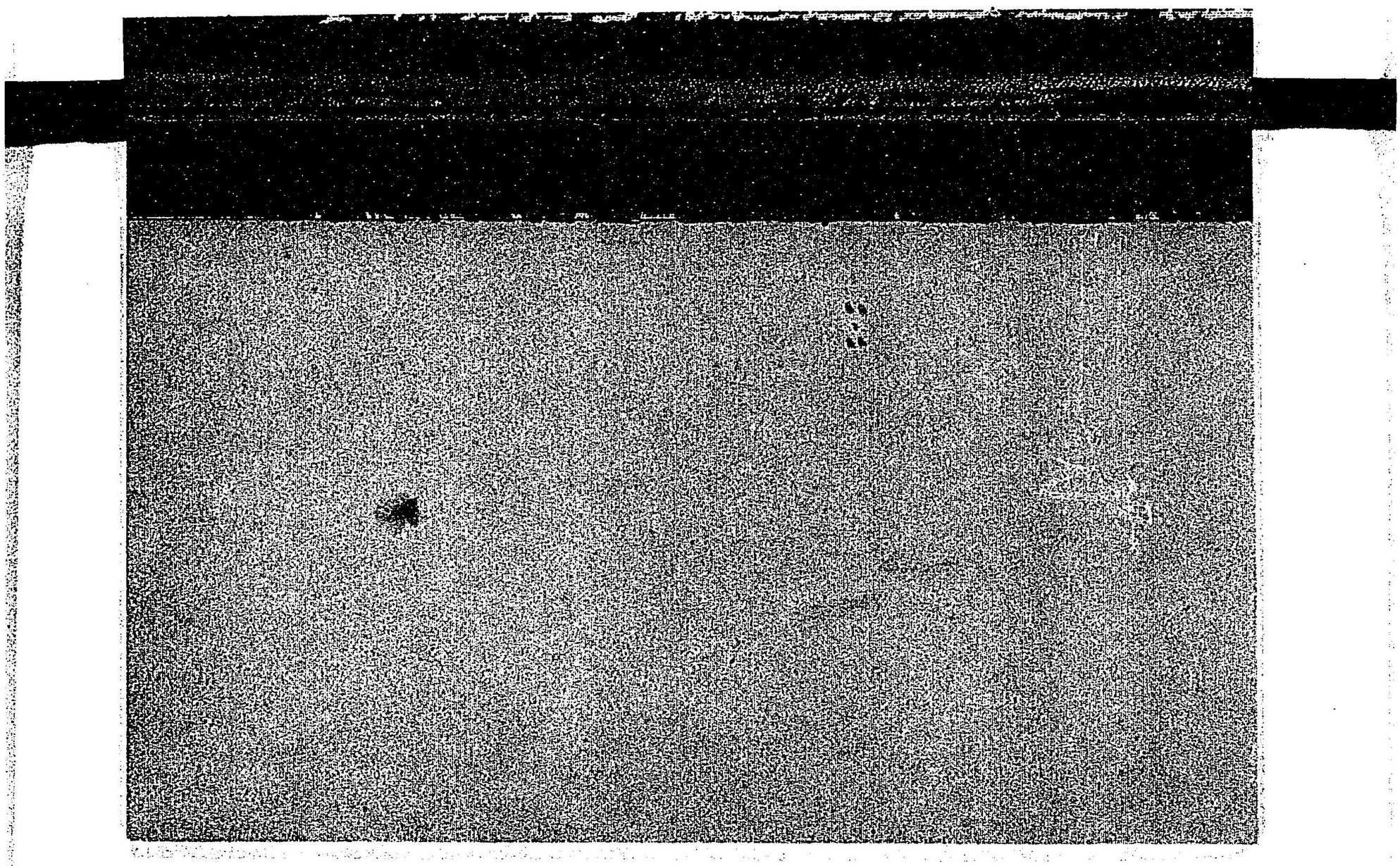
版權登錄

明治廿二年二月十三日印刷
同　年二月十四日出版　定價十五錢

發行者　大阪東區內本町二丁目百卅九番屋敷　藤谷虎三
著作者　大坂北區曾根崎新地三丁目二百八十九番屋敷　太田貞治郎
印刷者　大阪東區高麗橋五丁目四十五番屋敷　大垣彌太郎
發賣者　大阪東區唐物町四丁目十二番屋敷　岡本伯助
發賣者　大坂南區末吉橋通四丁目八十九番屋敷　中村芳松

版權所有

2A-98



お眼鏡違ひ

太田貞次郎著

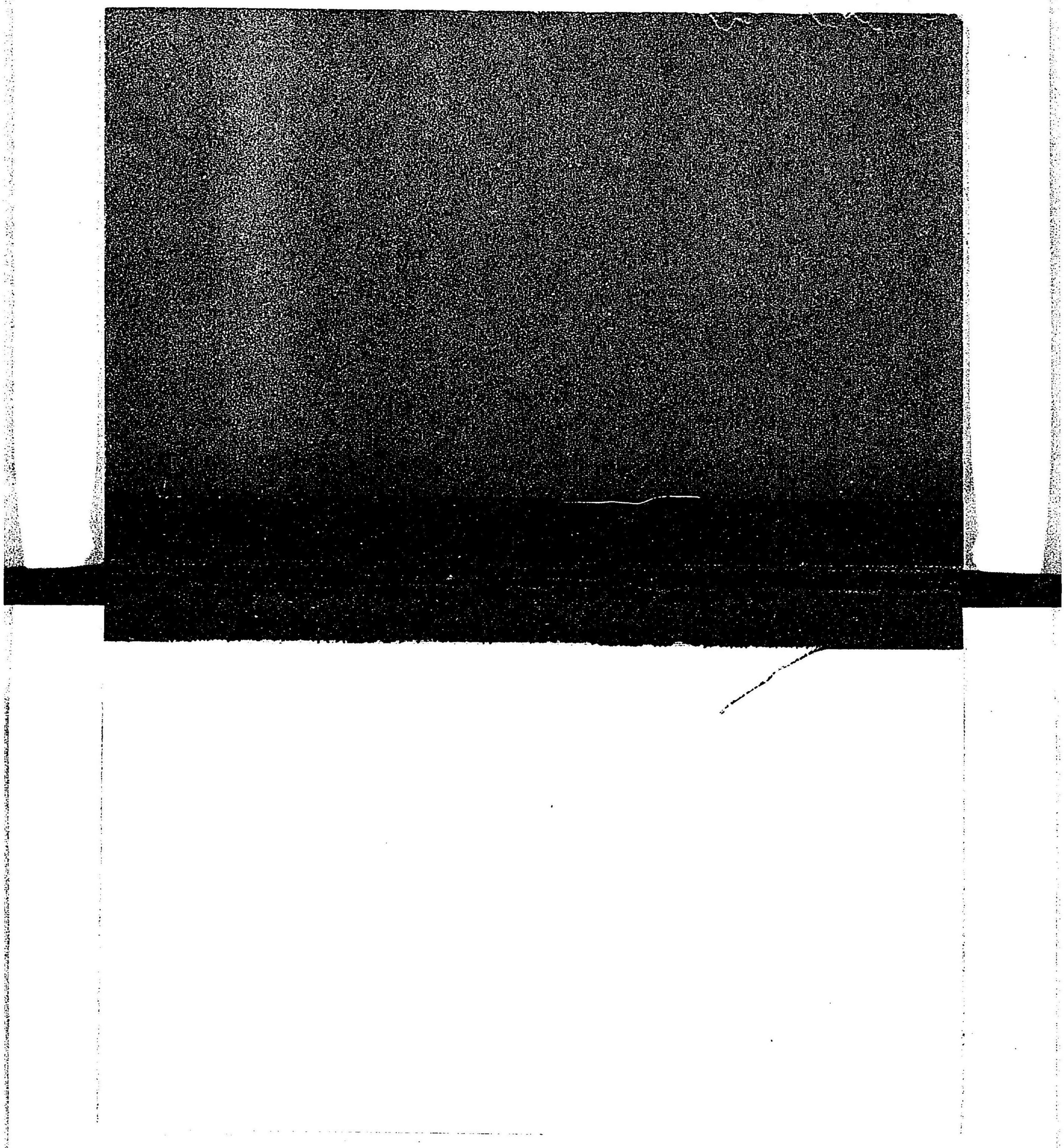
国立国会図書館

091601-000-2

特52-215

お眼鏡違ひ

太田貞次郎／著

M22

DBO-0047